高知県坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

私のテーマ

未来に向う「龍馬魂」出逢いの不思議

小寺 規雄

きっかけは祖母の遺影

今年の高知県立坂本龍馬記館20周年を祝うかの様に昨年は福山雅治演じる「龍馬伝」が放送され、大きなうねりとなり全国を駆け巡った。小生もそのうねりのなかにいた。

小生は、1968年9月29日兵庫に生まれた。その日は大政奉還を英断した徳川第15代将軍徳川慶喜候と同じ誕生日である。そしてこの年に大河ドラマ第6作目『竜馬がゆく』が放送された。時は明治百周年を記念して制作された大河ドラマ初の司馬遼太郎原作ドラマであり、近代日本の扉を大きく開いた青年「坂本龍馬」の生涯を描いたものであったらしい。小生は見ていたかもしれないが、当然記憶には無い。小生にとって記憶にも残る「坂本龍馬」の生涯を描いた大河は昨年の「龍馬伝」が最初である。その「坂本龍馬」という人物を本当の意味で意識するようになったのは、恥ずかしながら大学生の時だったと記憶している。当時祖母が亡くなり、遺影写真には家紋付きの着物を着ている祖母がいた。涙ながらに小生はその遺影写真をずっと見ていた。

その時、どこかで見たことがある家紋だと…。悲しさと寂しさと同時に無性に先祖への尊敬の念と有難さとそして家紋のルーツを知りたくなった。

祖母の死が小生に先祖を敬う事を始めて教えてくれたのかもしれない。父に「この家紋は昔からなのか?」と聞いた。小生の家紋は桔梗紋である。父の話のよると先祖が明智家から頂戴した大切な家紋とのことであった。小生は家中に目を向けた、今まで気にも留めていなかった蔵に行った。

蔵の中には古めかしい桔梗紋が描かれている提灯やら提灯を入れるケースや屏風等が出てきた。そうだ、この家紋は、幼い頃耳にしていた「坂本龍馬」とどこかで縁があるかもしれない?と考え始めた。「坂本龍馬」はご存知の通り、文久2年3月24日に土佐という今で言う「国」を脱藩した。この覚悟がそれほどまでのものなのか。龍馬が何故脱藩という手段を選らんだのか。

これは小生の私見なので、お許し頂きたい。

それはまさしく「出逢い」がきっかけである。文久2年1月15日長州の久坂玄瑞と面談をしている。その時に龍馬は大きな衝撃を受けたのだと思う。「大義の為なら貴藩も弊藩も滅亡してもかまわない」龍馬にとってこの言葉は龍馬自身が新たなステージの扉が開いた瞬間だろう。この扉が開いた瞬間、龍馬は土佐から日本を見る「龍」になったのではないか。ある種出逢いとはその人の人生を180度変えてしまうほど影響力があり、潜在的に「常識であったことが常識ではないかも」と思えるようにさえなる。

金に輝くプレート

そして、小生は「坂本龍馬」をとことん知りたいと思っていた。2010年の夏には既に大河「龍馬伝」絶賛放送真っ盛りであった。

そんな折に「坂本龍馬の総本山」でもある「高知県立坂本龍馬記念館」が実施している「龍馬検定」なるものを発見した。検定は、初級・中級・上級とあった。中級以上は検定料金が必要だが、初級は無料。小生は、先ず、初級は100点が取れるであろうと受験してみた。結果は恥ずかしながら、60点超えたくらいで小生にとって屈辱的な数字が目に飛び込んできた。中級以上の合格者は高知県立坂本龍馬記念館にネームプレートが貼り出される。坂本龍馬記念館に自分の名前が残るのである。中級のその上には金に輝く上級検定の合格者の方の名前が小生には〝神〟にさえ見えた。ここからが、大変な苦労であった。「坂本龍馬」の書籍は「龍馬伝」ブームの影響により数えられないくらい存在した。これら全てを購入するのは不可能である。皆様ご存知の通り龍馬に纏わる説も色々と存在する。ある意味ミステリーな人物でもあるが故にどの書籍が一般的な説として書かれているのかをより分ける作業から始まった。何冊か書籍を購入し、「坂本龍馬」の勉強というより新たに研究をし直したという方が的確である。しかし、この「坂本龍馬」という男は大変まめである。約140弱ある現存する手紙を解読するのも大変であった。また、一通の手紙ごとに必ず龍馬を取り巻く環境がバックヤードにある。また龍馬の手紙にはユーモアと優しさと意志の固さが手に取るように見える。送り主によって文体も変えている。既成概念に全く捕らわれない。時には本文より追伸が長いものさえあるのだ。文を読めば人物が窺えるというが、まさに龍馬はその通りである。そして8月14日、小生に金に輝く「小寺 規雄(沖縄)」というプレートを貼って頂く事ができた。

谷口さえ子さんと著者

一言で言うならばそれは「愛」

この作業を通じて一生涯の財産ができたと思っている。「坂本龍馬」が縁で出逢った方々とのお付き合いの開始である。ご本人に了解を得ているので紹介したい。先ずは、昨年多忙を極める中走り続けてこられた高知県立坂本龍馬記念館の森館長を筆頭に記念館の皆様(特に森館長は小生の事を沖縄から虎が来るぜよと言って小生を警戒されている(笑))。そして龍馬街道の吉富氏(彼は末恐ろしい魂を持っている福岡の奇才である)そして、昨年は一年最も出張に行かれたのではないであろうか「主婦の友社」の「RYOMA」編集長であるその名も坂本龍馬氏そして、高知にこの人在りだと実感した女性、性、谷口さえ子さん(彼女は初めて逢った方をご自分の車に乗せて龍馬縁の地を案内する素晴らしい方です)。まだまだ、ページが何枚あっても足りない程の縁があった。「坂本龍馬」の研究をするようになり、人生において一番大切な事を教えて戴いた気がする。それは一言で言うならば「愛」である。彼の行動や手紙には私利私欲が無く、全て国を愛し、仲間を愛し、家族を愛し、人間を愛していたと思う。

必ず未来に向かう「希」

このつたない小生の文で恐縮ではありますが、皆様の隣の方、家族でも職場仲間でも恋人、友人でもいい。1度手と手を握ってみませんか。そのお互いの手と手の空間には必ず未来に向う「希」があります。その「希」は必ず世界の人が握手をする第一歩だと思うのです。さあ、手を握って一緒に一歩でもいいです前に踏み出しましょう。

世界の皆様が笑顔で暮らせる世界の為に。

「坂本龍馬」の心を四季に沿ってご紹介します。

人に接する時は、暖かい春の心。
行動をする時は、燃える夏の心。
考える時は、澄んだ秋の心。
自分に向かう時は、厳しい冬の心。

最後になりましたが、このような記念すべき年の始まりに未熟な小生にペンを取らせて戴いた坂本龍馬記念館森館長並びに皆様に厚く御礼申し上げます。

オキラジFM85.4 http://okirajimk2.ti-da.net/
「龍馬魂」ブログ→http://norinoriradio.ti-da.net/

「描き切れぬほど龍馬は大きい」と語る福田さん（龍馬記念館）

「新しい龍馬を“創る”！」

シナリオライター　福田　靖さん　（大河ドラマ『龍馬伝』脚本家）

【インタビュアー】
渡辺　瑠海

大河ドラマ「龍馬伝」が終了した2010年11月、すでに脱稿し最終回の撮影を終えた福田靖さんがぶらりと記念館を訪れた。「龍馬伝」執筆前の取材で来館して以来、じつに2年もの月日が流れていた。

「昭和43年放送の司馬遼太郎の『龍馬がゆく』ではない龍馬をやること」

福田さんの中には3つの龍馬があるという。〝資料を調べていく中でイメージする本当の龍馬〟〝世の中の日本人が愛し続ける司馬遼太郎さんの創った〝竜馬〟〟そして今回の〝『龍馬伝』の龍馬〟。まさに〝エンターテインメントを創る主人公としての坂本龍馬〟だけを考え続けた数年間だったという。

龍馬は「エンターテインメント」だ

Q　『竜馬が行く』とまったく違う「新しい龍馬」の執筆に携わった数年間の福田さんのプレッシャーは計り知れないものだったと思いますが、やっと一息つかれましたか。

「今はすべて終わって、やりきった！という充実感、そして虚脱感がありますね。でも仕事から解放されてものすごくリラックスしてますから大丈夫ですよ」

Q　「史実と違う」と言われることも多かったと思いますが、史実に重ね合わせつつ、オリジナルストーリーを作るのは大変ではなかったですか？

「うん、その「歴史と違う」という言葉が曲者で、僕は脚本が〝歴史と違う〟とは思ってないんです。もちろん、時には史実を端折ってはいますが、歴史的事実をまったく違う風に曲げて描くのは極力避けたし、それはやっていません。僕自身、〝大河ドラマはエンターテインメントだ〟と思っています。

エンターテインメントとは、大きな嘘をついて、細かいディテールは正確に、というのが鉄則ですからね（笑）。

実は『龍馬伝』を書くにあたっていろいろ調べていくうちに、「司馬さんのこのシーンはここから引っ張ってきたのか」とか、「このことこそを組み合わせたのか」とわかって面白かった。ああ、これはやはり〝小説〟だったんだと冷静に見られるようになりましたね。しかし、じゃあそもそも日本人が持っている「龍馬のイメージ」って何？と疑問がわいてくる。〝豪放磊落で、自由で何ものにも縛られず、時に無作法だけど愛される人柄〟というのは、あれは司馬さんが創ったキャラクターとしての主人公なんですよね。昔、館長さんがおっしゃっていましたが、来館者に『お田鶴さまとはどういう方ですか？』と尋ねられて、それはフィクションですから実在しません！というとびっくりするし、『じゃ、寝待ノ藤兵衛は？』と言われて『そういう人もいません！』というと更にびっくりされると（笑）。司馬さんの創ったキャラクターなんですよ」

Q　『龍馬伝』では最初福山さんと龍馬のイメージが合わず、私はちょっと戸惑いました。でも、回を追うごとに龍馬は骨太になり、第三部からはすっかり違和感がなくなった、これは狙いだった？

そう！まさに〝狙い〟です（笑）。

主人公のタイプには二通りあるんですよ。水戸黄門とか古畑任三郎みたいに毎回同じですっと変わらないことが魅力の主人公、そして、『巨人の星』や『エースを狙え！』みたいに成長していく主人公。『龍馬伝』は「一年間かけて成長していく龍馬を作る」のがスタートラインでした。

もともと龍馬の先祖は商家で、お金で武士の身分、侍格を買ったわけだから、ことさら〝人に後ろ指さされないよう、しっかりしなさい〟と教えられてきたはずです。そう考えると無作法で豪放磊落な〝従来の龍馬〟ではなく、むしろ普通の少年だったのではないかと僕は解釈した。ごくごく普通の穏やかな青年が成長していくというコンセプトの上では、福山雅治さんの演じる今までと違う〝龍馬〟には確信がありました」

脚本と演出のはざまで生まれる新しい龍馬

――弥太郎視点から龍馬を描くというアイデアは斬新でしたね。

「『竜馬がゆく』とは違った視点を探しているうちに、岩崎弥太郎という人物を〝発見〟してピンときました。龍馬と同時代に生まれた土佐の人で、龍馬とは記録上では土佐商会と海援隊という関係で、龍馬が亡くなった後でわーっとのし上がってきて、まさに龍馬がやろうとしたことをやっていく人物。

弥太郎はすごく頭のいい人だったそうですけど、龍馬よりも身分の低い家に生まれてずっと小役人で、そういう環境の人がもしボンボンの龍馬と知りあいだったら、多分頭にくるだろうなと思った（笑）。本当にこの二人は『アマデウス』のモーツァルトとサリエリのような関係です。このアイデアが思い浮かんだ時点で〝よし、何かできるぞ！と思いました」

――しかし弥太郎の背負っていた鳥がごはすごかったですねえ（笑）

「あれは現場の意向でしょう（笑）。僕自身、弥太郎があそこまで汚れているとは思っていませんでしたし、台本上はあんなに埃まみれなんて書いてないですよ。もちろん「鳥かごを背負った人間がやってくる」とは書きましたけど、あれじゃ、「鳥かごがやってくる」ですよね（笑）。多分、弥太郎が後々偉くなるのはわかっているから、極端なところから思いっきりやっちゃえという監督と香川さんの意向だと思います（笑）」

Q　ドラマの中で福田さんが最も気に入っているシーンは？

「長次郎が死んだとき、長次郎の写真と一緒に龍馬が酒をのむシーン。あのシーンの福山君がものすごくよかった。まるで福山君に龍馬がのりうつっているように見えました。あのボンボンだった男が成長したということも全部含め、いろんな意味で役者としても素晴らしい演技でした。あの龍馬の顔は良かった」

Q　福山雅治さんは龍馬を演じて何か変化があったように見えましたか？

「もう、彼は昔とは全然違った顔になりましたよ。福山さんは4年に1回しかドラマに出ない人で、僕が彼をかっているのは、彼のキャラクター以上に〝音楽は自分の好きなようにやらせてもらうけど、芝居に関してはそうじゃないので言ってください〟という、福山さんの謙虚な姿勢なんです。

ですから最初の頃は、手取り足取り細かく芝居をつけてやらなきゃいけないな、とか、龍馬だけど負担にならないよう、なるべく台詞を減らそうとか、そこまで考えていたんですが、撮影が始まると完璧。これは香川照之さんが共演だったのも大きくて、そこから福山さんはみるみるうちに覚醒しました。なんといっても1日の間に〝福山雅治〟でいるよりも、龍馬〝でいる時間の方が長いんですから（笑）」

Q　もし龍馬が暗殺されずに生きていたら、福田さんはどんなストーリーを考えますか？龍馬はその後どんな人生を？お龍さんとうまくやっていけた？

「ハハ、お龍とうまくいかないというのはちょっと夢がないので、何とかうまくいってほしいですね（笑）。そうですねぇ。龍馬はひょっとすると〝なりたかった〟のかもしれないけど、政治家にはならなかったと思うし、多分無理だと思ったりして、やっぱり商売してるんじゃないでしょうか。弥太郎とは今以上に血で血を洗う争いをしていたかも。もう、シャレにならないぐらいの

ライバル関係になって、龍馬は弥太郎の堪忍袋の尾をことあることに、いちいち切らせるような役で、弥太郎が龍馬を罵倒し続ける人生が延々と続く（笑）」

――そう来ますか（笑）

「ただ、冷静に考えてみたら、やはり彼はあそこで死ぬしかなかったのかなぁ……死んだからこそ、今の龍馬があるのかなぁと思ったりします。うーん、これはなかなか難しいけど。僕自身、ト書きに「息絶える龍馬」と書いた瞬間はやはり、かなりしんみりしました。

最終回の撮影の日、近江屋で昼ぐらいまで弥太郎さんのシーンを撮影して、そこから龍馬の撮影、暗殺シーンは多分朝の5時ぐらいからと言われたので、僕は一度家に帰って、夜中の3時ぐらいにスタジオに行った。すると、もうスタジオに入ったときから、あたりが異様な空気なんですよ」

――異様な空気？

「スタジオがシーンとしてる。モニターを見ている人が誰一人しゃべっていない。あ、撮影が始まってるなと思ってふと見ると、すでに龍馬が血まみれになってる。撮影を終えた香川さんもみんな現場に残ってて、龍馬が息絶えるまで腕を組んでじっと見つめている。その情景も含めてすべてがなんともいえないものでした。

でも、ある意味、龍馬は解放されたのかなとも思いましたね……。なんといえばよいのか、彼の最後は生き急いでいるとは言わないまでも、一人の人間が背負う仕事としては大変重い、目一杯の活躍だったと思うんです。そこで殺されたのは本当に悲しいけど、一方で彼は解放されたんじゃないかなと思うんですよ。

脚本家としては、1年間愛してもらったキャラクターを最後で殺す、しかも、いきなり踏み込まれて殺される、これは交通事故みたいなもので難しい部類のドラマです。お客さんが観終わった後に、「いやぁ、面白かった！」という気持ちになる種類のドラマではなく、むしろ、終わったとき「え!?そりゃないだろう？」っていわれる種類のドラマです。僕はこういう種類のドラマは初めてでした。龍馬暗殺の喪失感から次の希望につながる仕掛けをする必要があった。『龍馬伝』では、弥太郎が龍馬の死をどう受け止めるかが従来とは違う新しい部分です」

脇役たちの秘められた役割

Q　「龍馬伝」では女性たちの役割もとても大きかったですね。

「ええ。幕末ドラマはともすると出てくるのが男ばかりになるので、女性キャラクターをしっかりと描きました。たとえば加尾は地元で付き合った初恋の人。東京に出てきて再会して、門限もなくて何でもOKなのに、そのときにはお互い価値観が違っていて結ばれない。佐那は東京で出会った、田舎には絶対いないタイプの女性です。しかし佐那は「剣術ロボット」。このロボットに龍馬が〝人間の心〟を吹き込むという設定だから、佐那は恋をするけど龍馬はそうじゃなくてすれ違う。で、お龍は社会に出てから出会った、酸いも甘いも噛み分けた生々しい女性です。お元は水商売を通して出会った愛人タイプ。これは現代でも通じる分け方にしています。お元は〝奉行所のスパイで隠れキリシタン〟という相当の飛道具キャラで、イメージはボンドガール、完全な創作キャラですよ（笑）」

Q　ドラマでは長州藩の役割も綿密に描かれていましたね。それは同じ長州人として思い入れが強かった？

「いや、長州をどうこうしようって気は最初あまりなかったんですけど、描いていくと、必然的に長州のポジションがドラマ全体の中で非常に大事だと気づいたんです。薩摩と長州で幕府を倒すといっても結局西郷さんはだめになるし、そこで長州藩の底力が見えてくる。高杉が死んでもペーペーだった伊藤俊輔やら誰やらどんどん出てくるという層の厚さは、やはりすごいですよね」

――山内容堂公も強烈なインパクトがありましたね。

「容堂公は例えるならば〝ダース・ベイダー〟です。脚本に近藤正臣さんのお芝居と演出が加わり、どんどんスケールが大きくなっていった。年齢設定をあえて上げて、全体的に黒っぽい衣装の人たちの中でひとり絢爛豪華な衣装で、空恐ろしい、底の知れない絶対的な人物として描くと、ああなりました。近藤さんが『大河には今まで5、6回出たことがあるけども、大河の仕事っていうのは単調で、役者の仕事としてはとてもつまらない。でも今回の『龍馬伝』だけはほんとに楽しかった！』と言ってくださった（笑）」

――ドラマを見ていても役を楽しんでるのがわかります。

「ええ、まさにそうなんです（笑）」

Q　しかし、龍馬のお母さんとお登勢さんが〝二役なのはどうしてですか？

「あれは、最初草刈民代さんをお母さん役で口説くときに、第一話で終わるのも何だから、寺田屋のお登勢は龍馬の大阪の母親のようだというようなイメージで配役したと思うんですけど、僕は草刈さんの〝二役を了解したものの、いざ龍馬がお登勢に会うシーンを書き始めると、〝顔が同じということを龍馬が不思議に思わないはずがない！〟と、しばらくそこに縛られて止まってしまいました（笑）。だって普通、こだわりますよね？」

――実際に母親とまったく同じ顔の人に会って疑問を抱かないはずがないですね（笑）

「そうでしょう？　本当は生きてたのか、とかいろいろ悩むシーンも必要でしたし（笑）。「龍馬って呼んでくれ」って言うことで、やっぱり違うとか、あの辺は逆にいいシーンになりましたけどね（笑）。

Q　それでは最後にひとつ質問です。今、龍馬が目の前にいたら、どんな言葉をおかけになりますか？

「そうですねぇ……そうですねぇ……。（しばらく考え込んで）〝あなた、命を使いきったな〟と。ええ。これ『龍馬伝』の最後の台詞にも出てきますけど、君は十分、命を使いきったねと言うでしょうね」

――それは、幸せなことなんでしょうか？

「それは幸せなことです！　僕が思うに、それはとっても幸せなことです。龍馬は幸せな人生だったと思います。だって、まさか、こういう風に自分のことを語り継がれているわけですから」

こぼれ話

―犬歩棒当記（四）―
「浪華のことも夢のまた夢」

京都国立博物館　宮川　禎一

「龍馬の手紙は歴史的である以上に国語的（文学的）に読むべきだ」とは筆者の持論だが、では本当にそう読んでいいのか？そんな話題だ。

龍馬が「正月廿日夜」と日付した春猪あての手紙（北海道坂本龍馬記念館蔵）を従来の慶応三年一月ではなく一年前の慶応二年一月二十日夜、すなわち薩長同盟密約の会議前夜に書いた、としたのは筆者である。春猪に酷い悪口を書いたのもその日の龍馬のストレスを解消するためだ、との解釈である。それはそうとして、手紙の末尾に注目すべき遺書のような文章が見られる。

「私ももし死ななんだらりや、四五年のうちには（土佐に）かえるかも。（しかし）露の命ハはかられず。先々（春猪は）ごぶじでおくらしよ。」

ずいぶん文学的な表現だが「私龍馬の命は草の葉に付いた朝露のようなもの。何時はかなく消えるかもしれないよ」との意味である。「露の命ハ、はかられず」は七五調なのでより文学的なのだ。実際、慶応二年一月の京都は龍馬にとって大変に危険であった。この手紙を書いたわずか三日後に伏見の寺田屋で幕吏に襲われ、死にかけたのだ。

ごく最近気づいたのだが、この龍馬の遺書めいた文学的表現には本歌があったのではなかろうか。

「露と落ち露と消えにし我が身かな浪華のことも夢のまた夢」

そう、豊臣秀吉の辞世の歌である。私が現代人なので気づくのが遅かったのだが、江戸時代人にはこの本歌は常識ではなかっただろうか。あの天下人秀吉さえ自身の命を「露と消えにし」と表現しているのである。

龍馬の手紙でもうひとつ。慶応二年十二月四日の兄権平あての手紙（写のみ伝来）の中で池内蔵太の遭難死について悼んで「人間の一生実に猶夢の如しと疑ふ」と記している。これは『平家物語』でもあるし、信長の故事でもあるし、秀吉の辞世にも通じている。坂本龍馬の文学的素養（江戸時代的な歴史の素養）の一端が表れているのであろう。即物的ではなくじつに文学的だ。若い頃から和歌に親しみ、自ら和歌も多く残している龍馬らしい表現だ。

坂本龍馬が明治時代まで生き延びたら何をしていたか？とはよくある話題であるが、案外、小説家になっていたのかも知れない。

豊臣秀吉を祀る豊国神社の唐門
（国宝。伏見城の門とされる。京都市東山区所在）

コラム・龍馬のこと

検証・長崎の龍馬伝説 ―龍馬は「亀山社中」を創設したのか？―

亀山社中ば活かす会幹事
織田　毅

今、長崎はNHK大河ドラマ「龍馬伝のおかげで、空前の龍馬ブームである。その中で耳にするのは、「龍馬は長崎と深い関係がある。なぜなら、龍馬が長崎に亀山社中を設立したから」という趣旨の発言。確かにこれは通説のようで、『坂本龍馬事典』にも、亀山社中とは「龍馬が慶応元年閏五月ごろに組織した浪人結社」とある。だが、筆者は最近その説（以下「龍馬創設説」と略）に、やや疑問を抱いている。その理由を次に述べたい。

まず、龍馬が残した記録（手紙等）によって、慶応元年5月～閏5月ごろの行動を見てみよう。この年4月25日に大坂を（薩摩藩船で）出航した龍馬は、5月1日に鹿児島着。5月16日には鹿児島を出発して、23日に太宰府に着く。28日に太宰府を出て閏5月1日に下関着（「坂本龍馬手帳摘要」）。　そして中岡慎太郎の日記によれば、閏5月29日に龍馬・中岡は下関から京都に向かっている。長崎に行った記録はどこにもない。

さらに、龍馬は手紙で当時の行動をこう書いている。「龍ハ下春江戸より京ニ上リ夫より蒸気の便をえしより九国（九州）ニ下リ諸国を遊ビ、下の関ニ至る頃、初五月十日前なりし（中略）龍此地（九州及び下関?）ニ止ル前後六十日計ナリ」（慶応元年9月7日）。やはり、長崎はでてこない。

また、別の手紙ではこうある。「私共とともに致し候て盛なるハ、二丁目赤づら馬之助、水道通横町の長次郎、高松太郎、望月ハ死タリ。此者ら廿人斗の同志引きつれ今長崎の方ニ出稽古方仕リ候」（慶応元年9月9月）。これを「亀山社中」の創設を知らせたもの、とする人もいるがそうではない。なぜなら、「廿人斗の同志引きつれ…」の主語は龍馬ではなく、新宮馬之助たちだからだ。それでは、この時龍馬は何をしていたのか。

それは同じ手紙の少し後の箇所に書かれている。「私しハ一人天下をへめぐりよろしき時ハ諸国人数を引つれ一時にはたあげすべしとて…」。

龍馬は長崎に行った同志とは別の場所で、別の活動を単独で行っていたのだ。龍馬がこのように書き分けているのは興味深い。

そして、もう一つ言っておきたいのは、「龍馬創設説」が、昭和に入って主張され始めたことである。これは、平尾道雄先生の名著『坂本龍馬　海援隊始末』（昭和4年）がもとになっている。この本の中で平尾先生は、「一行は小松に同伴し、同地の亀山に宿所を構えへ、こゝを本拠として、航海に携はる事となった。（中略）長崎の本拠が亀山だから、称して亀山社中と云ふ」と書かれている。「一行」とは、前5行目に「龍馬等の一行」とあり同じ意味ととらえられる。この記述が「龍馬創設説」を生み「亀山社中」という歴史用語を一般化させたのではないだろうか（ちなみに最近の論考では、「亀山社中」という言葉は使用されない）。それをさらに広めたのが、司馬遼太郎作『竜馬がゆく』であった。ただし、先生はその後の著作（『龍馬のすべて』（昭和41年））で、「龍馬の同志たちは別行動をとって長崎へ出た。（中略）長崎では亀山という場所に宿舎を設け、航海業に従事することになったのである。社中というのがそれだった」と書かれている。

龍馬が社中を創設したのではなく、リーダーでもなかったとすれば、真のリーダーは誰だったのか。それは薩摩藩家老小松帯刀ではないかと考える。しかも社中隊士たちも小松の家来として活動していた形跡すらある。　龍馬が指揮・監督していなかったからこそ、近藤長次郎の自刃という悲劇が起こったのではないか。龍馬が、「己れがおったら殺しはせぬのぢやつた」と言った（お龍の回想）のは、そうした社中の実情を物語っているようだ。

高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
http://ryoma-kinenkan.jp